

社会不安の情報処理過程におけるpost-event processingの役割

(The role of post-event processing in the information processing of social anxiety)

五十嵐 友里 (Yuri Igarashi)

指導：嶋田 洋徳

問題と目的

社会不安障害の治療については認知行動療法が有効であるものの、改善の余地があると示唆されており (Clark et al., 2003), さらなる体系化の必要があるといえる。Clark & Wells (1995) や Rapee & Heimberg (1997) は社会不安の認知行動モデルについて検討し、情報処理のバイアスが社会不安の維持要因として働くことを示唆している。本研究はこれらの認知モデルで示唆されたpost-event processing (PEP) に焦点を当てた。

PEPは、社会的場面の回顧段階であり、社会不安者の不安感情やネガティブな自己知覚が特に顕著であるとされる。社会不安の高い人は、社会不安の低い人に比べてPEPが活性化されやすいことが示されている (Rachman et al., 2000など)。しかしながら、PEPに関する先行研究を展望した結果、以下の4点が問題点として指摘された。それらは、①わが国において、PEPを適切に測定することのできる尺度が整備されていない、②PEPと心配、反すうの異同や関連について明らかにされていない、③PEPがどのようなメカニズムで社会不安の維持に影響を与えているのかが不明確である、④PEPに介入して、社会不安症状を低減させた研究がほとんど見当たらない、であった。

したがって、上記4つの問題点を解決するために、社会不安の情報処理過程におけるpost-event processing (PEP) の役割を検討することを目的とした。

研究1・2：PEPと類似する他の認知的処理との異同

【目的】 上記の問題点、②を解決するためにそれぞれの認知的処理の思考様式の異同や特徴を示すことを目的とした。

【方法】 対象：都市部近郊の大学生211名。調査材料：①改定版Cognitive Intrusion Questionnaire (Langlois et al., 2000)による尺度に項目を追加(CIQ), ②Liebowitz social anxiety scale日本語版 (朝倉ら, 2002: LSAS)

【結果と考察】 CIQにおける各項目に対する評定を従属変数、認知的処理とLSASによる社会不安傾向群を要因とした分散分析を行った。その結果、PEP、反すう、心配の順で過去指向的であること、PEPは反すう、心配と比較してイメージで経験されやすく、さらに、そのイメージは観察者視点のイメージとして浮かぶ傾向が高いことが示された。

研究3：post-event processing Questionnaire日本語版の作成

【目的】 上記の問題点①を解決するために、PEPを測定するpost-event processing Questionnaire日本語版(PEPQ)を開発し、信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

【方法】 対象：4年生大学生および短期大学生653名、社会不安障害患者17名。調査材料：①Rachman et al. (2000) によるPost-event processing Questionnaire(PEPQ)を日本語訳したもの、②日本語版反応スタイル尺度(名倉・橋本, 1999: RSQ), ③Penn State Worry Questionnaire日本語版(杉浦・丹野, 2000: PSWQ), ④Short Fear of Negative Evaluation Scale(笹川ら, 2004: SFNE), ⑤Social Avoidance and Distress Scale (石川ら, 1992: SADS)。

【結果と考察】 PEPQ日本語版について、信頼性と妥当性の検討を行った。その結果、作成されたPEPQは高い信頼性と妥当性を有する尺度であることが確認された。

研究4：PEPが社会的状況に対する解釈に与える影響

【目的】 上記の問題点、③を解決するために、社会的場面を経験しているときの社会不安に特徴的な注意・解釈バイアスとPEPの関連に焦点を当てた。PEPが社会不安の維持にどのような影響を与えるのかを検討する一環として、PEPがこれらの情報処理バイアスとどのような関連にあるのかを検討することを目的とした。

【方法】 参加者：Social Phobia Scale (金井ら, 2004: SPS) によるスクリーニングを行い、大学生12名を対象とした。課題：スピーチ課題。従属変数：①Focused Attention Scale (山田他, 2002: FAS), ②聞き手の行動に対する解釈-自由記述 (課題後, 3日後), ③Post Event Processing Questionnaire日本語版

【結果と考察】 聞き手に関するネガティブな解釈の割合を従属変数、群、時期を要因とし、SDS得点を共変量とした共分散分析を行った。その結果、社会不安の低い参加者のネガティブな解釈は時間と共に減少し、社会不安の高い参加者のネガティブな解釈が時間と共に増加していたことが示された。また、FASによって測定された観察者視点の自己注目得点を従属変数とし、群を要因とした分散分析を行ったところ、高群において有意に高い得点が認められた。

すなわち、高群はスピーチ中により観察者視点で自己に注目していたことが示された。したがって、解釈はPEPの活性化を受けてネガティブに歪められる可能性が示され、また、その過程には観察者視点の自己注目が関連していることが考えられた。

研究5：社会的場面における解釈バイアスが状態不安に与える影響

[目的] 研究4でPEPが社会的状況における解釈にネガティブな影響を与えることが示された。しかしながら、PEPが社会不安に影響を与えるかどうかという点までは検討されなかったことが問題点として挙げられた。そこで、PEPが社会不安の維持に与える影響を検討する一環として、研究4をふまえ、研究5では解釈バイアスが社会的場面を経験している時の状態不安や後続の類似場面への予期不安に与える影響を検討することを目的とした。

[方法] 参加者：SFNEによるスクリーニングを行い、大学生19名を対象とした。課題：スピーチ課題。従属変数：①STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版(清水・今栄, 1981)のうち、A-State尺度20項目(スピーチ課題前、課題後、休憩後)、②聞き手の行動に対する解釈-自由記述(スピーチ課題後)

[結果と考察] 聞き手に関するネガティブな解釈の数を従属変数、群を要因とし、SDS得点を共変量とした共分散分析を行った。その結果、社会不安傾向群と解釈の感情価の交互作用が有意であり、単純主効果の検定を行ったところ、高群はネガティブな解釈が最も多く、低群はニュートラルな解釈が最も多かったことが示され、解釈バイアスが生じていたことが示唆された。さらに、状態不安を従属変数、群を要因とした分散分析を行ったところ、社会不安高群は測定時期によって不安の高さに差異があり、実験の時系列に沿って高い不安を報告したことが明らかになった。一方で、低群においてはそのような差異は認められなかった。したがって、ネガティブな解釈は社会的状況を経験しているときの状態不安を高め、さらに、後続する類似の社会的場面に対する予期不安を高める影響力を持つ可能性があることが示された。

研究6：社会不安障害患者におけるPEPに付随するSUDの変化

[目的] これまでの研究で示されたPEPの影響性について社会不安障害患者においても確認されるかを検討することを目的とした。

[方法] 参加者：社会不安障害の診断を受けた患者のうち、主治医の許可と患者の同意が得られた8名。調査材料：最近1週間で不安を感じた場面とその場面に対する思考に関して、半構造化面接を用いて質問した。

[結果と考察] 実際に場面を経験しなくても、PEPに従事し

ているだけで当該の疾患の苦手とする社会的出来事に対する同程度の不安を感じていることが示された。したがって、PEPの活性化が状態不安を高め、予期不安を高めることにつながることが示唆された。

研究7：事後の認知的処理が社会不安に与える影響

[目的] 上記の問題点、③を解決するために、反すう、心配とPEPの関連に焦点を当てた。PEPがこれらの社会的状況後の認知的処理とどのような関連にあるのかを検討することを目的とした。

[方法] 対象：4年制大学生および短期大学生925名。調査材料：①PEPQ日本語版、②RSQ否定的考え込み尺度、③PSWQ、④SFNE、⑤Social Avoidance and Distress Scale(石川ら, 1992:SADS)、⑥LSAS

[結果と考察] PEP、反すう、心配が回避に与える影響について検討を行った。PEP、反すう、心配間には相互の矢印、それぞれの認知的処理から回避への矢印を描き、探索的モデル特定化分析を行った。その結果、PEPは反すうや心配の活性化の始まりとして機能し、回避、他者評価懸念、社会不安といった社会不安症状に影響を与えることが明らかにされた。特に、「PEP→反すう→心配→社会不安症状」という処理の流れの影響が強いことが示唆された。

研究8：現実的な自己イメージの知覚によるPEPの操作が社会不安に与える影響

[目的] これまでの研究結果をふまえて、ビデオフィードバック(VF)による社会的状況の現実的な自己イメージを知覚することがPEPを操作し、社会不安の低減に影響を与えるかどうかについて検討することを目的とした。

[方法] 参加者：SPSによるスクリーニングを行い、社会不安傾向の高い大学生23名を対象とした。課題：スピーチ課題。従属変数：①PEPQ日本語版、②SPS。群：VF+認知的対処群、認知的対処群、統制群の3群。

[結果と考察] PEPQ得点を従属変数、介入群と時期を要因、SDS得点を共変量とし、2要因共分散分析を行った。その結果、交互作用が有意で、VF+認知的対処群の参加者は1回目のスピーチに対してよりも、2回目のスピーチに対するPEPが活性化されなかったことが示唆され、他の群よりもスピーチに対する回顧的処理の活性化が低減されたことが明らかになった。また、SPS得点を従属変数、介入群と時期を要因とし、2要因分散分析を行った結果、交互作用が有意で、VF+認知的対処群においてTime2に比べてTime3の得点が低かった。したがって、VF+認知的対処群は、パフォーマンスに対する社会不安の程度が減少したことが示された。これらの結果から、現実的な自己イメージの呈示としてのビデオフィードバックはPEPを操作し、社会不安の低減に有効であることが示唆された。